上山　逃げるわけにもいかないから、とにかく出来ない自分に集中して、突き詰めて考えました。すると、ふと「自分は出来ないんだ」ということがわかったんです。自分には何もない。空っぽなんだ。このとき初めて、「神さまに委ねる」ということがわかったように思います。そして、空っぽのまま自分から離れて説教を書き、読み返したとき「ああ、ここに福音があるな」と素直に感じました。

栗山　……わかるなぁ。

上山　それまでは「自分が書いた説教」「自分が語る御言葉」と、常に自分主体に考え、説教を読み返しても「まあ、いい出来じゃない」と思うぐらい。自分自身がそこから福音を聴くとは思ってもいませんでした。でも、違った。説教は、自分ではなく、神さまが語ってくださるのだと受け取れるようになったことが、大きな変化です。

● 最前線で恵みを受け取る神学生生活

栗山　私も、説教を聞いても恵みを受け取れず、聖書を読んでも御言葉が語れず、伝道者としてふさわしいのか悩む期間が、けっこう長く、1年弱続きました。その間に夏期伝道実習があり、壁にぶち当たって、ギリギリまで神さまと対峙して、ようやく「委ねる」ということができた。そうしたらすごく楽になったんです。だから、先生方が「夏期伝では失敗してこい」とおっしゃるのもわかりますね。御言葉は能力で語るものではない。神さまが自分を通して語ってくださり、その恵みを説教者である自分も受ける。それを実感し、改めて牧師の務めの大切さ、面白さに気づきました。

栗山 尚典
（くりやま ひさのり）

— 大学院1年 —

【献身まで】 1979年生まれ。高校卒業後広島から上京し、フリーターを経て就職。営業職として成績が上がらずに悩んでいたとき、クリスチャンである母から送られた「ヤベツの祈り」（ブルース・ウィルキンソン著）や聖書を読み、神の恵みを確信。教会に通うようになり、一生を献げる務めは牧師だと思い、入学。

富山 希望
（とみやま のぞみ）

— 学部3年 —

【献身まで】 1989年生まれ。中学2年～高校時代の途中までを牧師である父の留学先、米国で過ごす。在米中、仲の良かった友人が神を信じきれず希望を失うのを支えようと試みるが、伝わらず悩む。その一方で、漠然としていた牧師という将来像や伝道への思いが固まり、帰国後、高等学校卒業程度認定試験を経て、入学。

――神学生であることの喜びとは？

箕口　以前勤めていたときは、忙しくて聖書がなかなか読めませんでした。それと比べればやらなければいけないこと、向き合わなければいけないことが、聖書だったり、神さまに仕えることであるのは神学生の恵み、幸いだなと思います。聖書ばっかり読んでいてもいいし、四六時中神さまに仕えることを考えていられる。それは恵みである一方で、牧会者の、御言葉を取り次ぐものの責任でもあると思います。

富山　私を覚えて祈ってくださる方々がいることに、改めて感謝ですね。東神大のよいところは、先生方が学生一人ひとりを本当によく見てくださること。牧師になるなら、ここです！

栗山　神学生の喜びは、御言葉の恵みを最前線で受け取れることだと思います。誰もが試行錯誤しますが、信仰共同体としての大学で、また教会生活で徐々に整えられていく。自分は寮生ですが、寮の仲間の支えも大きいです。だから、神さまに呼び出されたと思ったら、安心して来てください！